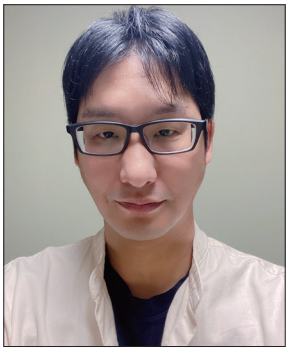
2023

第29回
函館港イルミナシオン映画祭
第27回シナリオ大賞
函館市長賞〈グランプリ〉

荒い波は月に引かれ、孤高な月は日に照らされて

小谷 悠



【作者プロフィール】

84年生まれ、鳥取県出身、東京在住。
設備メーカー勤務の傍ら、小説の執筆を始める。
コロナ在宅勤務が激増する最中、本格的に脚本も書き始め、現在に至る。

【梗概】

淡路の新庄へ奉公へ出ている菊弥、後の高田屋嘉兵衛は、よそ者とされイジメを受けていた。イジメに屈さない菊弥は元服して嘉兵衛と名乗る。

唯一、村一番の美少女ふさは、嘉兵衛を慕っていた。

ある日、ふさは、村の者からの夜這いから逃げる為、嘉兵衛と契りを交していると嘯いてしまう。これを機に「嘉兵衛狩り」が勃発する。嘉兵衛は村から抜ける事を決意。

また、ふさも嘉兵衛の後を追うと決意。

一足先に、嘉兵衛だけが淡路を出奔する。

その後、親戚の堺屋喜兵衛を頼り、廻船問屋の奉公を始める。

能力がずば抜けて高い嘉兵衛は、一人前になる事を急ぐ。

急ぐ理由は、ふさが村を抜けて出奔する前に、一人前の給金が欲しい為である。

結局、ふさが来る前に一人前にはなれなかったが、直に樽廻船に乗り給金を得られるようになり、二人は子供も授かり結婚する。

最中、嘉兵衛は江戸で大黒屋光太夫と出会い、北海道とロシアの情勢を知る。これにより、将来的な展望を得て、本格的に北前船へ参入するよう画策を始める。

その一手が豪商、北前家の支援の取り付けである。支援を得る為、また名声を上げる為、新酒番船に参加し、圧倒的な力量と策で一番となる。

同時に、鰹漁も始め、ちゃくちゃくと資金作りを開始する。

更に、北風家の資金援助も取り付け、北海道の現地視察へ出かける事となる。

この旅に、ふさも同行する。

妻ふさの夢であった船旅、今後の展望の話し合いなどを函館で行う。

北海道での活動を見据え、嘉兵衛は「高田屋」を立ち上げる。

【人物】

菊弥（８）（１４）……嘉兵衛の幼名
高田屋嘉兵衛（２５）……主人公
ふさ（８）（１４）（２５）……主人公　嘉兵衛の妻
喜十郎（４５）……嘉兵衛の奉公先の主
弥右衛門（４５）……漁師。嘉兵衛の親方
堺屋喜兵衛（３５）……兵庫の奉公先の主
北風荘右衛門家（６０）

嘉蔵（２３）……嘉兵衛の弟。
金兵衛（２０）……嘉兵衛の弟
善兵衛（２１）……嘉兵衛の弟
嘉四郎（１８）……嘉兵衛の弟
嘉十郎（１７）……嘉兵衛の弟

侍女（３０）……ふさの侍女

幾右衛門（４５）……ふさの父
子供Ａ……淡路の子供
子供Ｂ……淡路の子供
子供Ｃ……淡路の子供
若者Ａ……淡路の若者
若者Ｂ……淡路の若者
若者Ｃ……淡路の若者
若者Ｄ……淡路の若者
鳥取の卸
兵庫の卸
貞代（３０）……喜兵衛の妻
熊野の網元（５０）
江戸の商人
銭湯の客
江戸の人々Ａ

江戸の人々B

江戸の商人B

大黒屋光太夫（44）

○村のあぜ道・外

T「月夜の雄飛」

ふさ（14）があぜ道を走って来る。

ふさ「喧嘩じゃ、喧嘩じゃ、喧嘩じゃ」

ふさの後を侍女（30）が追う。

侍女「ふさ様、お待ちを、待ってください」

ふさ「早う、早う」

ふさ、道を走っていき、その後を侍女が追っていく。

○海岸・外

海岸で菊弥（14）、後の高田屋嘉兵衛が、同年代の子供と対峙している。

ふさ、小さな小屋の背後に隠れて、その様子を窺う。

侍女も息を切らせてやって来る。

侍女「なん、ですかぁ」

ふさ「またやりよる。3対1や」

相手の子供は3人で棒を持っている。

子供のうち二人は厳めしい顔つきだが、一人の子供Cは狼狽えている。

ふさ、頷く。

ふさ「ふむふむ」

ふさ、別の方角を見て、大人の漁師が船で片付けをしていると確認。

視線を子供達に戻す。

狼狽える一人を、菊弥は睨む。

子供C「ひっ」

と、怯える子供C。
残りの子供二人が菊弥へ飛び掛かってくる。
子供A「でやぁ！」
菊弥、子供Aの棒を躱し、怯んでいる子供Cへと飛び掛かる。
子供Cを羽交い絞めにして、残り二人を恫喝する。
菊弥「離れい！　こいつがどうなってもええんか！」
ふさ、嘆息。
ふさ「それはぁ……悪手やなぁ」
子供A、Bは容赦なく棒を振りかぶり、菊弥に斬り掛かって来る。
菊弥「なっ！　なんじゃ！」
菊弥、子供Cと共に飛び退く。
子供A「おさえとけ！　小太郎！　お前ごと叩き切るぞ！」
子供C「うわあああ」
子供C，菊弥を逆に捕まえる。
菊弥「離せ、阿呆！」
子供Cは必至で菊弥の腕を捕まえる。
子供A、Bが棒で殴りかかってくる。
菊弥「っちい」
菊弥、背中を向けて子供達の打撃を背中で受ける。
菊弥「っぐ！」
子供C「なん……（で）」
菊弥、子供Cを砂へ放り投げると、息を荒げて袖を肩まで捲る。
菊弥「やったるわ。覚悟せえ」
子供B、Cはしっかりと様に

なった形で棒を構える。
ふさ、首を振る。
ふさ「あかん、あかん。勝てんよ、そいつら道場行っとる奴等やよ」
ふさ、体を小屋から出して
大きく息を吸い、叫ぶ。
ふさ「喧嘩じゃあ！　誰か止めえ！」
子供達とは別の方角の大人の
漁師へ叫ぶ。
漁師A「またやっとるか、あいつら」
漁師達がやってくる。
漁師B「浜で喧嘩すな！　あっちいけ！」
子供A、Bは顔を見合わせ、
菊弥に睨みを利かせる。
子供A「覚えとれよ、他所もん」
子供A，Bは去っていく。
菊弥、浜に転がっている子供Cを睨む。
菊弥「いね！」
子供C「っひ！」
子供C逃げていく。
菊弥も、背中を負傷して痛がりながらも去っていく。
侍女は、胸を撫でおろす。
侍女「はぁ……、何が面白いんですかぁ、ただの子供の喧嘩ですよ、ふさ様……」
ふさが、いつの間にか居なくなっている。
侍女「あれ？　ふさ様！　ふさ様！」

○山中の峠道・外

菊弥が山道を上って来る。

背後から、ふさが歩いてくる。
ふさ「あかんなぁ、あれはあかんわぁ」
ふさ、菊弥の前に出て、満面の笑みで視線を合わせる。
ふさ「何があかんと思う？　菊弥」
菊弥、顔を背ける。
菊弥「また見とったんか、物好きが」
ふさ「なぁ、何があかんやった？」
菊弥、歩く。
菊弥「あのガキ、見た事ないわ……。仲間……でもなかったな。他所もん……他所もんか」
ふさ「正解っ！　少し前から奉公にきとる、本村のもんじゃ。菊弥と同じやで。せやから」
菊弥、背中を押さえる。
菊弥「狙う奴を間違えたか」

ふさ、首を振る。
ふさ「んん？　やり方を間違えたんじゃ。あの二人は手練れやし、開けた場所でやっても勝ち目はない。一回引いて、立て直すんが筋じゃ」
菊弥「引けるか！　女の考え方じゃ！」
ふさ、笑う。
ふさ「情報も持たんくせに、威勢だけは猛っとるの」

ふさ、陽気に歩きながら、リズムよく話す。
ふさ「阿呆じゃ、阿呆じゃ、男は皆、阿呆ばかりじゃ」
菊弥怒る。
菊弥「なんじゃと！　私は阿呆ちゃう！　文字かて読み書きできる」

ふさ「そやった」

○（回想）診療所・中

ふさ（8）が、医者に薬を貰っている。

医者の診療所の奥の座敷で菊弥（8）が本を広げて習字をしている。

その真剣な様子に、ふさは頬を赤らめる。

医者、ふさの額に手を当てる。

医者「また、熱が出とるの」

ふさ、菊弥を見たまま、

ふさ「……あん」

○山中の峠道・外

ふさ、楽し気に道を外れていく。

ふさ「あ、ここ、ええ場所よ」

菊弥「うろうろすな！　この道は熊が出るぞ」

ふさ「こんな昼間の熱い時にはでりゃせん」

ふさ、繁みの先へ行ってしまう。

菊弥も嘆息して追う。

○山・崖

見晴らしいの良い崖で、眼下には波辺や瀬戸内海が一望できる。

ふさ、座って眺める。

海には船が出ている。

ふさの隣に、菊弥は座る。

ふさ、指を筒のように丸くして、海を眺める。

菊弥「なんじゃ、それ」

ふさ「筒」
菊弥「よう、見えるか？」
ふさ「気がする」
　一艘、船を指す。
ふさ「一つ、早いのがある」
　菊弥も船を見る。
菊弥「うちの親方じゃな」
ふさ「弥右衛門かぁ」
菊弥、ふさに顔を近づけ、指の筒を少し離して自身も覗き込む。
菊弥「親方は、潮を読むんじゃ」
　菊弥、人差し指で海の中をなぞる。
菊弥「ここに進む」
　指の後を、船が追うようについていく。
菊弥「ここで舵切り」
　指を動かすと、同じように船が動く。
ふさ「おお！　凄い凄い」
菊弥「ここで、帆を折る」
　指の指示通りに船が海を進む。
　ふさ、楽し気に菊弥へ向く。
　菊弥の真剣な様子。
　ふさ、再度海を眺める。
ふさ「菊弥も、潮が読めるんじゃな」
菊弥「二年も乗って読めん奴は阿呆じゃ」
　ふさ、海の先を眺める。
ふさ「あの内海の先にも、行ったか？」
菊弥「先月、瓦を降ろしてきたな」
ふさ「ええな」
菊弥「何がじゃ、稼ぎは皆、網元……お前のところに吸い上げられとる」

ふさ、微笑。
ふさ「網元の娘は、船に乗ることもできん。よそ者の農民の息子は、海で自由に、どこまでも行ける。ええなぁ」
菊弥、真剣に海の先を眺め、腕を組む。
菊弥「淡路の瓦の儲け方、気付いてしもうた。聞くか？」
ふさ「うんうん。教えて」
海を眺めながら、二人は会話を続ける。

○菊弥の家・庭先・外

庭先で喜十郎（45）が菊弥の髪を剃っている（月代）
その横で、弥右衛門（45）が茶を飲んでいる。
弥右衛門「ほんまに、ここの若衆に入らんつもりか？」
菊弥「誰が入るか。今日やって」

○（回想）村の井戸

菊弥が井戸で水を汲んでいる。
数人の男がやってきて、後ろから襲い掛かって来る。
菊弥「やめい！」
男達は菊弥の腕を掴むと、背中を蹴って来る。
井戸に落とそうとしてくる。
菊弥「いい加減にせい！」

○菊弥の家・庭先・外

菊弥、怒り顔になる。
菊弥「こんなのは毎日じゃ。その上、奴等の宿で下僕になるなど、考えるだ

け背中が痒くなる」
弥右衛門は足を組みながら、
耳をかいている。
弥右衛門「ここは漁師の村じゃけな、農民の事をバカにしとる」
菊弥「もう、わしは本村から出とる」
弥右衛門「出身が農村じゃ」
菊弥「出身がなんや？　漁師が何や？誰もわしより船を漕げん。潮も読めん。風も読めん。魚の居場所も見当違いを探しよる。何が漁村の民じゃ。片腹痛いわ」
弥右衛門、じっと菊弥を見る。
弥右衛門「その口やと村におれんようになるぞ」
菊弥、真剣な眼差しで庭先を見つめる。
菊弥「構わん」
弥右衛門、嘆息。

○同・和室・中

硯に墨をすり、筆をつける。
半紙に名前を書き込んでいく。
「嘉兵衛」と書く。（以後、嘉兵衛）書いた名前を見て小さくぼやく。
嘉兵衛「めでたい……。呑気な名じゃ」

○網屋（ふさの実家）・外観

海岸付近に建つ門構えのある立派な屋敷。
多くの世話人、漁師が出入りしている。

○同・食堂・中

ふさが女中と共に炊事をしている。

若者Aなど数人が食事をしている。

若者A「日に日に、女になるの」

若者B「ええ加減、夜這いの許可は降りんものかの」

若者A「主様には、この前わしからも申し出たが……」

一同「が？」

若者A「ふさが首を縦に振らんらしい」

一同、落ち込む。

若者B「いつまで子供のような事を言うとる。わしはぁああ！　もう待てんぞ。今日にでも忍び込むぞ」

若者A、飯を掻きこむ。

若者A「待てるのは、今年の祭りまで。わしらは、もう待てん」

一同、頷く。

○同・ふさの部屋・中

ふさ、カンカンに怒っている。

ふや「嫌じゃ！　何度も言うとろ！　否！　何度でも言うたる！　否じゃ！」

幾右衛門（45）は狼狽している。

幾右衛門「そこをなんとか！」

ふさ「知らん！」

幾右衛門「と、いうてもなぁ……。もう若い衆が収まらんのや」

ふさ「知らん！　勝手に決めるな」

幾右衛門、そっぽを向きながら、

幾右衛門「……（小さな声）言うてし

もうた」
ふさ「あん？」
ふさ、幾右衛門を睨む。
更にそっぽを向く幾右衛門。
幾右衛門「言うて、もうた」
ふさ、幾右衛門に近づき眼を
飛ばす。
ふさ「何を？」
幾右衛門「だんじりの後なら……」
ふさ「なら？」
幾右衛門「ええよ……って」
ふさ激昂。
ふさ「はあああ！？　何、勝手なこと言うとんじゃ！」
幾右衛門も起こり始める。
幾右衛門「か、勝手、いうな！　わ、わしの勝手に決めて良い事やぞ！」
ふさ「いいわけあるか！　わしの事やぞ！」
幾右衛門「家長は、わし！　わぁし！」
睨み合う二人。
ふさ「無理」
幾右衛門「ええ加減にせい」
ふさ、腹を擦る。
幾右衛門、驚愕する。
ふさ「もう、遅いわ」
幾右衛門、更に驚く。
幾右衛門「えええ！」
不適に微笑むふさ。

○神社・夜

月が上がっている。

○同・倉庫・夜

嘉兵衛、山車の片付けをしている。
若者Cが声をかける。
若者C「後は、任してええか？」
嘉兵衛、会釈する。
若者C「なぁ、嘉兵衛」
嘉兵衛「はい」
若者C「今年のだんじりは、村のもんと騒ぎを起こさんでくれよ。大人連中が、ひりついとるんじゃ」
嘉兵衛、そっぽを向く。
若者Cは嘆息して、嘉兵衛の肩を叩く。
若者C「ええ加減、頼むわ」
若者C、去っていく。
嘉兵衛、山車を倉庫へ片付けると、小屋の前で腰を下ろし休憩する。
嘉兵衛「屈して、どうすんじゃ。つまらん」
山から麓を見下ろすと、嘉兵衛は眉間を寄せる。
嘉兵衛「ん？　なんじゃ、あれ」
ぽつぽつと、暗がりに火が見える。

○村の周辺・外・夜
村の入り口付近で、大量の若者が松明を片手にうろついている。
若者A「おったか？」
若者B「おらん。逃げよったか、臆病もんが」
若者Aが憤る。

若者A「今度という今度は許さん。あん首、叩き切ってくれる」
嘉兵衛「なんの騒ぎや」
嘉兵衛、木の影からそれを覗く。
若者Dがやってくる。
若者D「本村の祭り稽古らしい。帰って来るのを待ち伏せるか？」
若者A「それがええ。手練れを集めい。嘉兵衛の家じゃ！」
嘉兵衛、驚く。
嘉兵衛「わし？」
嘉兵衛、身を屈めて草叢の中で移動する。
嘉兵衛「どうなっとる」

○弥右衛門の家・外・夜

若い衆が松明片手に弥右衛門から事情を聴取している。
弥右衛門が首を振ると、去っていく。
弥右衛門が嘆息すると、暗い背後の小屋の影から嘉兵衛が声をかける。
嘉兵衛「なんの騒ぎじゃ、親方」
弥右衛門、嘉兵衛へは顔を向けずに答える。
弥右衛門「こっちが聞きたいわ。お前、やってくれたな」
嘉兵衛「何を？」
弥右衛門「若い衆は、もう止まらんぞ。殺されるか、よくても村八分じゃ。ここへも、もう来るな」
嘉兵衛、暫し考える。
嘉兵衛「……分かった」

弥右衛門、小さく首を振る。
弥右衛門「簡単に、分かもんじゃな……」
嘉兵衛「いつかこうなる。それが、今日だっただけじゃ。奴等の理由なんぞ、知ったことやない」
弥右衛門、嘆息。
弥右衛門「結局わしは、お前に何も教えられんかったな」
嘉兵衛「船は、習った」
弥右衛門「もう、お前の方が上じゃ」
嘉兵衛、顔を俯ける。
弥右衛門「あてはあるんか？」
嘉兵衛「叔父が、兵庫におる。弟も」
弥右衛門「喜兵衛か。廻船問屋、やったな……。そうか」
弥右衛門、頭を掻く。
弥右衛門「志筑に、伝馬船があるじゃろ。あれ、くれたるわ。内海くらい、夜でもいけるじゃろ、お前なら」
嘉兵衛、頭を下げる。
嘉兵衛「かたじけない」
嘉兵衛、背を向ける。
弥右衛門「結局、一度も屈さんかったな。凄いやつや」
嘉兵衛、会釈して去っていく。

○山中・夜

小走りに上って来る嘉兵衛。
息を切らせ、立ち止る。
山から麓を見ると、松明の火はもっと増えている。
嘉兵衛「なんぼほど出てきとんのじゃ。人でも取って食うたんか、わしは」

ふいに、背後から抱き着かれる。
ふさ「やっときたあ！」
嘉兵衛「おわ、なんじゃ、なんじゃ！」
嘉兵衛、飛びついてきたふさに顔を向ける。
嘉兵衛「ふさ……か。なにしとるんじゃ、こん山中で」
ふさ、一歩下がると、頭を下げる。
ふさ「すまん！」
嘉兵衛「は？」
ふさ「すまん！」
嘉兵衛、首を傾げる。
嘉兵衛「だから、なんじゃあ？」
ふさ「言うてしもうた！」
嘉兵衛「何を？」
ふさ、嘉兵衛へ顔を上げる。
意を固める。
ふさ「契っとる！　って」
二人は沈黙。
嘉兵衛「……え？」
嘉兵衛、更に首を傾げる。
嘉兵衛「ふさが、か？　誰と？」
ふさ「あんたと！」
嘉兵衛「いつ？」
ふさ「知らん！」
嘉兵衛「……」
嘉兵衛、一度、空を見上げる。
嘉兵衛「なんじゃと！」
ふさ、腹を擦る。
ふさ「ややもおる……と」
嘉兵衛「頭、おかしゅうなったか？」
ふさ、怒る。
ふさ「だって夜這いさせえ煩いんやも

ん！　こう言うしかないやろ」
　嘉兵衛、頭を抱える。
嘉兵衛「で、わしが殺されようとしとる、と」
　ふさ、顔を伏せる。
ふさ「すまん」
　嘉兵衛、ふさの下げた頭を撫でる。
嘉兵衛「ええわ。どの道、もうこりごりやった、こん村にゃ。ええ機会じゃ」
　ふさ、顔を上げる。
ふさ「村だけか？　わしにもこりごりか？」
嘉兵衛「それは……。そんな事はぁ、ないこともないこともない」
ふさ「はっきりせい！」
　嘉兵衛、ほほ笑む。
嘉兵衛「ふさには何も怒っとらん」
ふさ「じゃったら！」
　ふさ、櫛を嘉兵衛に渡す。
ふさ「わしの宝物。持っといて！」
嘉兵衛「は？」
ふさ「どうせ、弟の嘉蔵のとこじゃろ？　様子みて、わしも行くから。それまで、わしやと思うて持っておくんや」
嘉兵衛「何言うとんじゃ、お前は……」
　ふさ、激昂。
ふさ「行きたい！」
嘉兵衛「いや……」
ふさ「行きたい！　行きたい！　行きたい！」
　ふさ、顔を近づける。
ふさ「行く！　わしだけこん村に残る

など、絶対、嫌！　行くからな！」
　嘉兵衛、嘆息。
嘉兵衛「金、無いで」
ふさ「稼げばええじゃろ！」
嘉兵衛「稼ぐ……。簡単に言うな」
ふさ「なんでもできる！　わし等なら！」
　生き生きとしたふさの顔。
嘉兵衛「でもな……」
　ふさ、ぐっと体を近づけてくる。
ふさ「嘘やから、説得力が無いんやな」
嘉兵衛「は？」
　ふさ、嘉兵衛を見上げる。
ふさ「契っとくか？」
嘉兵衛「何を……」
　嘉兵衛、ごくっと唾を飲み込む。
　ふさの美しい瞳。

○満月

○山中・夜

　ふさ、服を整えている。
ふさ「も、もう……嘘やないから、な」
　嘉兵衛、腰ひもをしっかりと占める。
嘉兵衛「おう」
　嘉兵衛、櫛を胸の内にしまう。
嘉兵衛「ゆっくり来い。急いで、一人前になっておくからの」
　ふさ、ほほ笑む。
ふさ「おう」

○浜辺・夜

　小舟を海に出し、乗り込む

嘉兵衛。
嘉兵衛、ふさの櫛をまじまじと見つめ、懐へ入れる。
嘉兵衛「さて、行くかの。この海、どこまで続いとるか、しかと見届けたるわ」
船を漕ぎ出す。
暗い海に、月光が道を作る。

○西出町の街・喜兵衛の家・玄関前

T「江戸へ、翔る」
嘉兵衛、長屋の周りをウロウロしている。
思い立った様に片手を上げる。
嘉兵衛「お、おう、こちらで荷受けがあって……」
言葉を止めて咳込む。
嘉兵衛「村八分にあっての！　……なーんちゃって」
ウロウロする嘉兵衛。
嘉蔵（20）と堺屋喜兵衛（35）がやってきて、疑問を浮かべる。
嘉蔵「兄やん、何しとる」
嘉兵衛「いや……、あぁ、そのだな……」
喜兵衛、嘆息して家へ招く。
喜兵衛「入れ。兄者から聞いとる。来ると思うとったわ。話、きかせい」
罰の悪い表情で、喜兵衛、会釈する。

○同・居間・中

嘉兵衛、土下座をする。
嘉兵衛「ここで、雇うてください」

喜兵衛、腕を組んで困っている。
喜兵衛「お前の船の腕は知っとるんや、じゃが……村、抜けたんやろ？　うちが淡路に卸せんようになったら、どうする」
嘉兵衛、顔を上げる。
嘉兵衛「高々、若衆がいきっとるだけや。それに、淡路程度の卸し先やったら、別を探せばええ」
喜兵衛、苦い顔をする。
嘉兵衛、座ったまま喜兵衛へ距離を詰める。
嘉兵衛「因幡だけやのうて、北でも西でも東でも行くつもりじゃ。わしがおると、何かと便利やぞ」
喜兵衛と嘉兵衛の睨み合い。
喜兵衛、根負けして頷く。
喜兵衛「奉公人と、同じに扱うで。食いぶちは、己で稼ぐんや」
嘉兵衛「承知の上じゃ」
喜兵衛、覚悟を決めた面持ち。

○船着き場・外

嘉兵衛、船に荷を積んでいく。
嘉蔵、慌ててやってくる。
嘉蔵「兄やん、何しとる！」
嘉兵衛「おう嘉蔵、出るぞ。因幡じゃ」
嘉蔵、空を見上げると曇っている。
嘉蔵「出るって、あん空の天候じゃ、誰も出取らんで」
嘉兵衛「誰も出んから、儲かるんじゃ」
嘉蔵、嫌そうな表情。

○海・船上・外

船先に立っている嘉兵衛、舵を持っている嘉蔵へ手を出して合図。

嘉兵衛「止めい！　錨を降ろす」

嘉蔵「ここでか？　海の真ん中やで」

二人で錨を降ろす。

船首で嘉兵衛が先にある天候の悪い海を眺めている。

嘉兵衛「半刻寝とれ」

嘉蔵、寝る。

嘉兵衛、嘉蔵を叩く。

嘉兵衛「起きい！　ほんまに寝る奴があるか」

嘉蔵「嵐の前に、体力を……」

海の先の天候が晴れている。

嘉蔵「晴れとる」

嘉兵衛「冷たい風は沖に流れとる。放っておけば過ぎていくわ。まだ、こんな風も読めんのか、嘉蔵」

嘉蔵、苦笑い。

嘉蔵「さ、すが、兄やん」

○鳥取県赤崎港・船着き場

T「鳥取藩赤崎港」

平然と荷下ろしする嘉兵衛。

嘉蔵も荷下ろしをしていると、

嘉兵衛と卸の男が帳簿を持って話している。

卸の男「いやいや、さすがにそれは払えんなぁ、灘の酒とはいえ高すぎる」

嘉兵衛「やったら買わんでええ。こんな、他でも引き手はあるんじゃ」

梅雨時に鯨海を渡る船は少ないので

卸の男「いやいや、待たんか！　1割、差し引いてくれんか」
そろばんを弾いてみせる。
嘉兵衛、嶮しい表情。
嘉兵衛「それは三割じゃ。そろばんが読めんと思うておるじゃろ。吹っ掛けられて機嫌が悪い。負けて五分じゃ」
卸の男は苦しい表情で項垂れる。
卸の男「しゃーないの。それでええわ」
嘉兵衛は握手をする。
卸の男は嘉蔵を見つけてやってくる。
卸の男「堺屋におったか？　あんな奴。この天候で船動かして、読み書き数字、駆け引きもできよるわ」
嘉蔵、にんまり微笑む。
嘉蔵「わしの、兄やんじゃ」

○兵庫港・船着き場

T「兵庫港西宮」
嘉兵衛が船を降りてくる。
そのまま別の荷を積みこむ。
嘉蔵「何しよる！？」
嘉兵衛「行くぞ、次は熊野じゃ」
嘉蔵「戻ったばっかりじゃ」
嘉兵衛「いまは時化が悪い。儲けどきじゃ」
嘉蔵、空を眺めると天候が悪い。
嘉蔵「今回も、晴れるんやろな」
嘉兵衛、腕を組んで睨む。
嘉兵衛「今回は……のお」

○海上・船・夜

嵐の中を船が進んでいる。
嘉蔵、ずぶ濡れでなんとか縄に捕まっている。
嘉蔵「大時化じゃ！　死んでしまう」
嘉兵衛、帆のロープを引いている。
嘉兵衛「ひっくり返らん限り、死にゃせんわ！　放り出されんように、体を縛っとけ！」
嘉蔵は縄で体をしばるが、嘉兵衛はそうした処置をしていない。
嵐の中で、帆を引いている。
嵐が収まる。
肩で息をしている嘉蔵。
嘉兵衛は上着を海に絞っている。
嘉蔵「よう、立っとれるな、あんな嵐の中で」
嘉兵衛「内のモモを絞って立つんじゃ。知らんのか」
嘉蔵「誰も、知らんのやないかな」
嘉兵衛は笑う。
嘉兵衛「緩いの、兵庫の船乗りは。内海から出直せい」
嘉蔵、苦笑い。

○兵庫港・船着き場

船が帰って来ると、また嘉兵衛は荷を積もうとする。
嘉蔵「またかえ！」
喜兵衛がやってくる。
喜兵衛「嘉兵衛、ちょいとええか？話がある」

嘉兵衛「ん？」

○喜兵衛の家・居間・中

居間で茶を飲んでいる喜兵衛と嘉兵衛と、隣で寝ている嘉蔵。

喜兵衛「生き急いどらんか？　嘉兵衛」

嘉兵衛、そしらぬ表情。

喜兵衛「熊野まで出ろなんぞ、わしは言うとらんぞ」

嘉兵衛、顔を下げる。

嘉兵衛「はよう、一人前にならんと……」

喜十郎「まだ２２じゃ。そない急がんでも」

嘉兵衛「急ぐ……んじゃ」

喜兵衛「なんでぇ？」

嘉兵衛「それは……」

喜兵衛、首を傾げる。

○西出町・街中・外

三度笠を被ったふさが、小屋の間をそそくさと抜けていく。

一つの小屋影に入り、きょろきょろと見回す。

また別の小屋影まで走り、見回す。

次の小屋の前で顔を出し、一軒家を覗く。

背後から嘉兵衛の声。

嘉兵衛「なにしとんじゃ」

ふさ、驚く。

ふさ「ひゃ！」

ふさ、振り返ると嘉兵衛がいる。

ふさ「あんたかぁ、びっくりさすな」

ほっとするふさ。
嘉兵衛「もう、来よったか」
渋面を作る嘉兵衛。
ふさ、この言葉にむっと怒る。
ふさ「なによぉ、それが身一つで追うてきた女への第一声か？」
怒り顔でぐっと顔を近づける。
嘉兵衛、たじろいで視線を逸らす。
嘉兵衛「早すぎじゃ」
ふさ「あんな村でじっとしとれるか！夜這いかけられるわ！　ええんか？それで、あんたはええんか！」
嘉兵衛「しかし……まだ金が」
ふさ「半年もやってて、まだ半人前かえ？　情けない事聞かさんといて」
ふさ、道へ出ると長屋の玄関前へいく。
ふさ「ここやな？　いくで」
嘆息する嘉兵衛。
嘉兵衛「ほらみい、急いでもこうなるんじゃ」

○喜兵衛の家・居間・中

ふさが正座で畳へ手をつき、喜兵衛と対面している。
喜兵衛も苦しい表情で嘉兵衛へ視線を送っている。
喜兵衛の隣には妻の貞代（30）も座っている。
ふさ「旦那が、お世話になっております」
喜兵衛、じっとり嘉兵衛を見る。
喜兵衛「旦那……」

嘉兵衛、バツが悪そうに顔を
伏せる。
ふさ「つきましては、私めもここ堺屋へ御奉公させて頂きとうございます」
喜兵衛、嘆息して首を振る。
喜兵衛「家も持たずに夫婦とは……近頃の若いもんは」
ふさ、凛々しく顔を上げる。
ふさ「よろしゅう、お願い申し上げます」
喜兵衛「嘉兵衛と嘉蔵だけで手一杯や。寝る部屋もないわ。おまけに、うちは廻船……」
ふさ「よろしゅう！　お願い申し上げとります！」
喜兵衛、貞代へ向く。
貞代「押しの強い子やなぁ。半人前や
と、給金なんぞどこでも出せんで」
ふさ「とはいえ、村抜けしてもうた以上、行く場もありません」
貞代「なんで、もうちょい村で耐えなんだ」
ふさ「一年あれば、嘉兵衛はやる男です！　と、見込んでおります故」
嘉兵衛、嘆息。
嘉兵衛「まだ、半年じゃ……」
ふさは引こうとしない。
貞代も根負けした様子。
貞代「分かった。奉公先、探してみるわ。せやけど、一緒には住まれへんで？まともな給金が出るまで、生き凌ぐだけの生活しか……」
言葉を遮り、ふさは土下座で
頭を畳に付ける。

ふさ「かたじけない！」
貞代、喜兵衛、共に嘉兵衛を見る。
貞代「えらい嫁、もろうたな」
嘉兵衛も頭を抱えていたが、頭を下げているふさの背中を擦る。
嘉兵衛「淡路一の、別嬪です」
喜兵衛、貞代は微笑む。
ふさと貞代が出ていく。
喜兵衛、酒瓶とちょこを持って来て嘉兵衛の前へおき、酒を注ぐ。
喜兵衛「祝言はまだ先じゃが、一杯、付き合え」
二人は酒を注いだちょこで乾杯して、ぐいっと飲む。
喜兵衛、冷静に呟く。
喜兵衛「一人前への近道は、一つやな」
嘉兵衛、真剣な面持ちで視線を向ける。
喜兵衛「樽、乗ってみるか？」
二人は視線を合わせる。
○兵庫港・船着き場
酒樽がどんどんと運ばれてくる。
真剣な眼差しでみつめる嘉兵衛と嘉蔵。
嘉蔵「すげえ。たった半年で樽なんて、兄やんはやっぱりすげえ」
嘉兵衛「江戸まで、辿り着けばの話じゃ」
兵庫の卸はやってくる。
兵庫の卸「江戸への樽廻船は、花形じゃけの。腕の良し悪しは、すぐに兵庫中

に広がるで」
嘉兵衛、真剣に船を見つめる。

○日本地図

日本地図と、太平洋側を通る経路。

N「西国の酒は、江戸では飛ぶように売れていた。腐敗の早い酒を運ぶには、短期間での運航技術が求められ、これらを専門に運ぶ船問屋は樽廻船と称された」

太平洋を抜けていく黒潮。

N「しかし、潮により遠洋へ流される危険性もあり、難所も多い命がけの航路ともされていた」

和歌山県紀伊大島（熊野）、愛知県伊良湖岬に×印で「難所」と表示される。

○海・船上・外

嘉兵衛が船主で海を眺めている。

T「熊野灘」

嘉蔵もやってくる。

嘉蔵「そろそろ熊野に入るで、兄やん」

嘉兵衛、身を乗り出すように海の先を見ている。

指でその先を指示する。

嘉兵衛「頭！　少し、向こうへ寄せてくれ！」

嘉蔵、驚く。

嘉蔵「あっちはあかんて！　黒潮で流されるで」

嘉兵衛「知っとるわ。青黒く潮が濁っ

とる。じゃが、見えるのはそれだけやない」
嘉蔵、疑問を持ちながら海の先を眺める。
ぴょんぴょんと水面上を魚が跳ねている。
嘉蔵「あれは……」
嘉兵衛「鰹じゃ。どえらい群れで泳いどる」
船が寄っていくと、水面に大量の鰹が泳いでいる。
嘉蔵「よう、見えるもんやな、あんな遠くから」
嘉兵衛「漁師もしとったからの、波の動きで一目瞭然や」
嘉蔵「はぁ……」
嘉兵衛、地図を広げながら舵を握っている船頭のもとへ行く。
嘉兵衛「頭、この辺りで栄えとる漁港へ寄れるか？」
船頭「串本あたりじゃろが……今は樽を運んでおる最中やぞ」
嘉兵衛「構わん。ふだんは半月じゃろ？わしなら、十日もあれば十分じゃ」
船頭「まぁ、ここまでも十分に早う来とるしの……」
嘉兵衛「この先、この寄り道が莫大な利益になるやもしれん」
船頭は首を傾げる。

○串本港・船着き場

T「和歌山県串本港」
港の漁師達の元へ行く嘉兵衛。

嘉兵衛「訊ねたいことがある。網元に会えるかの」
漁師は顔を見合わせる。

○網元の家・門の外

網元の家から出てくる嘉兵衛と嘉蔵。
嘉蔵はぐったりとしている。
嘉蔵「兄やんとおると、肝が幾つあっても足らんな」
嘉兵衛は笑う。
嘉兵衛「じゃが、思うた通りじゃ」

○（回想）網元の家・応接間・中

畳の敷かれた間で、嘉兵衛、嘉蔵が熊野の網元（50）と対面している。
熊野の網元「手伝う？　じゃと。お前らがか？　何をどうするいう話や」
嘉兵衛、体を前のめりにして、小声で話す。
嘉兵衛「実は……」
これを聞いて、網元は爆笑する。
網元「何を大ぼらふきよる、小僧。そんな事できるはずもなかろう」
嘉兵衛「今はできん。じゃが、来年なら……手筈をつけるで」
網元、ギロっと嘉兵衛を睨む。
網元「ほう……。どこから来る自信じゃ」
嘉兵衛「今から、江戸に行く。そこで、当てを見つけてくるつもりじゃ」
網元、立ち上がり背を向ける。
網元「その頃、また寄れ」
嘉兵衛、頷く。

○海・船上

嘉蔵、不安げな様子。

嘉蔵「江戸に、何があるんじゃ」

嘉兵衛「さあの」

嘉蔵「さぁ、って！？　当てはないんか？」

嘉兵衛、笑う。

嘉兵衛「何かあるに決まっておる。見て見い、嘉蔵」

嘉兵衛、真っ青に晴れた北の空を指す。

嘉兵衛「何か、ありそうな空じゃろ」

嘉蔵「晴れ晴れ……やな」

嘉兵衛、笑う。

○江戸港・船着き場

T「品川港」

商人が集まっており、小舟から荷を下ろす嘉兵衛達を見物している。

江戸の商人が呆然と勘定をしている。

江戸の商人「ほんとに、十日で来たんか」

嘉兵衛「西から飛脚が来とろう」

江戸の商人「先刻着いたばかりじゃ」

嘉兵衛、笑う。

嘉兵衛「相変わらず、足の遅い奴等じゃ」

商人達は驚く。

嘉兵衛「どう航路を取れば十日で来れるか、聞きとうないか？」

江戸の商人「聞きたい！」

嘉兵衛、ニマっと微笑み商人達

全員へ言う。
嘉兵衛「新鮮な酒もある。魚でつまんで話すとするかの」
商人達は騒ぐ。

樽を降ろしている嘉蔵は、その異様な風景に嘆息する。
嘉蔵「どこでも人へ寄っていくなぁ、兄やんは」
商人達と呑みにいってしまう
嘉兵衛。

○酒飯屋・中

商人達と愉快に酒を飲み交わす
嘉兵衛。
江戸の商人「何と！　まだ奉公人か？それでその腕とは、将来有望じゃの」

商人、クイっと酒を飲む。
江戸の商人「だが、十日で満足しなさんな。新年にもなれば、十日じゃ遅い」
嘉兵衛「新酒番船じゃな。毎年、新酒を江戸に運ぶ一番乗りを競っとるんやったな。そこでも、一番乗りになったる」
商人達は爆笑する。
商人「あんさんみたいな若者がなった事はないな。十年は乗らんと、相手にならん」
嘉兵衛「故に、わしが取ったら一人前の証になる」
商人「そりゃ……勿論そうだが、毎年一番乗りは、江戸と西宮を五日できよるぞ」
嘉兵衛、酒を飲みながら頷く。

嘉兵衛「五日……のう」
嘉兵衛がちょこに口を付ける
と、背後から酔った大黒屋光太夫（45）、が圧し掛かって来る。
嘉兵衛、大黒屋を押しのける。
嘉兵衛「なんじゃ！」
真っ赤な顔の大黒屋が、呟く。
大黒屋「ブラシュー」
嘉兵衛「は？」
商人がグイっと嘉兵衛の袖を
引き、耳元で囁く。
江戸の商人「関わりさんな。要人じゃ」
嘉兵衛「要人？」
大黒屋は千鳥足で人にぶつかり
ながら店を出ていく。
その様をじっと直視する
嘉兵衛。

江戸の商人「元は兄さんと同じ、廻船問屋です。時化で流され、ロシアで暮らしていたそうですな」
嘉兵衛「ロシア……？　なんじゃ、それは」
江戸の商人「遠い北。蝦夷よりも北へ上ると、氷に覆われた大国があると言います。その名も、ロシア」
嘉兵衛、ちょこを机に落とし、
震える。
嘉兵衛「それじゃ」
江戸の商人「それ？」
嘉兵衛「それじゃ！」
席を立ち走って出ていく。

○同・玄関外

嘉兵衛は急いで出てくると、

大黒屋を探す。
すぐに見つけて後を追う。
嘉兵衛「待てい！　そこのもん！」
大黒屋が振り返る。
嘉兵衛は詰め寄る。
嘉兵衛「ほんまか？　北に、大国があると」
大黒屋はふらふらと酔った顔で考える。
大黒屋「あるとか、ないとかぁ、北というか、西というかぁ、シベリアの先というかぁ」
嘉兵衛、目が輝く。
嘉兵衛「きかせい！　その話、もっと詳しゅう！」
大黒屋、パンと手を打つ。
大黒屋「ハラショー。一杯、飲ませてくれますか？」
嘉兵衛「何杯でも飲めい！」
嘉兵衛、大黒屋の背を押し、近くの酒場へ入っていく。

○酒飯屋・中

大黒屋は、揚々と語る。
嘉兵衛、酒も飲まずに聞いている。
大黒屋「ボルシチ！　ピロシキ！　ビーフストロガノフ！」
嘉兵衛「おお、なるほど……なんだそれは！」
大黒屋「カムチャツカ、サハリン、アザラシ大好き」
嘉兵衛「アザラシ！　とな！　なんだそれは……」

大黒屋は酔って眠ってしまうが、その前で紙に文字でメモをしている。
北海道、北方領土、カムチャツカ半島の絵が描かれており、その脇に「あいぬ」「いんてりめん」とメモしてある。
嘉兵衛「やはり、あったな。江戸には、何でもあるわ」
嬉しそうな嘉兵衛。

○江戸港・船着き場

船に嘉蔵達が荷積みをしている。
その脇で嘉兵衛は江戸の商人と話しをしている。
江戸の商人「蝦夷、ですか。それでしたら、あんさんの所が専門ですじゃろ」
嘉兵衛「専門？」
江戸の商人「北前といえば西廻り。西廻りといえば兵庫、兵庫と言えば北風様でしょう？」
嘉兵衛、呆然とする。
嘉兵衛「とう、だい……もと、くらし」
商人は笑う。
江戸の商人「只、蝦夷は要注意ですわ」
嘉兵衛「何故」
江戸の商人「ロシアは、御存知ですか？」
嘉兵衛「あ、あぁ……」
江戸の商人「随分南下しておるとの事。お上も神経質になっております。と、これは極秘ですが」
嘉兵衛へ耳打ちする。

江戸の商人「松前は、幕府の直轄になるやもしれませぬ」
商人は耳を話すと、笑顔を作る。
江戸の商人「故に、要注意です。利益を毟られるやもしれませぬので」
商人は去っていく。
嘉兵衛、頷く。
嘉兵衛「情報が、どこにでも転がっとるの、江戸には」

○串本港・船着き場

T「和歌山県串本港」
船着き場で、熊野の網元と嘉兵衛が話をしている。
そこに嘉蔵を呼び、何やら話をする。
網元は笑う。
網元「たった一度の江戸で、商売を見つけよったか。分かった。その話、乗ったるわ。只、条件がある」
嘉兵衛、網元からの条件に頷く。
嘉兵衛、頷く。
嘉兵衛「それは、条件とはいわん。前提というんじゃ」
網元と嘉兵衛は握手をする。

○兵庫港・船着き場

T「兵庫港西宮」
船が戻って来る。
船着き場に、ふさが待っている。
ふさ「おーい！　おーい！」
元気よく手をふるふさ。
喜兵衛に帳簿と金銭を渡すと、喜兵衛がそのうち金貨を取り出

して嘉兵衛へ渡す。
嘉兵衛「これは……」
喜兵衛「お前の儲け分じゃ」
嘉兵衛「しかし」
喜兵衛「一度の樽で、これだけ儲けた事は、わしには一度もないからの」
喜兵衛、ふさと顔を見合わせる。
喜兵衛「それと、やな」

○街

喜兵衛と嘉兵衛、ふさが歩く。
一つの家の前で立ち止る。
嘉兵衛「ここは……」
喜兵衛「十分じゃろ、ここで」
ふさ、満面の笑み。
ふさ「十分、十分！　ほら、嘉兵衛！礼を言わんか」
嘉兵衛「……は？」
ふさ、豪快に玄関を引く。
ふさ「わしらの家じゃ！」
嘉兵衛、喜兵衛へ顔を向ける。
喜兵衛、鼻の頭を掻く。
喜兵衛「お前だけの為やない……」
嘉兵衛「ふさの為、ですか……。忝い。私が半人前で嫁などもらってしまった故……」
ふさが首を振る。
ふさ「ちゃうちゃう。それだけ、ちゃう」
嘉兵衛「……は？」
開けられた玄関から、若い弟たちが出てくる。
金兵衛「兄やん！　もう、待ってられんぞ！」
嘉兵衛「金兵衛！」

ぞろぞろと弟が出てきて、
嘉蔵も喜ぶ。
嘉蔵「善兵衛！　嘉四郎！　嘉十郎！お前達まで淡路、出てきたんか！」
嘉兵衛、ふさと喜兵衛を見る。
喜兵衛「こんだけ出て来られたら、わしじゃよう面倒みん。お前が、一人前で面倒みいや」
嘉兵衛、頷く。
嘉兵衛「ええ、具合じゃ」
ふさの耳が動く。
ふさ「ん？」
嘉兵衛「人手が、いるところやったんじゃ」
ふさ、この言葉をしっかりと聞く。

○嘉兵衛の自宅・居間・中

ふさと嘉兵衛が帰って来る。
嘉兵衛、手の埃を払っている。
ふさ「ほんまにええの？　弟達……納屋で」
×　×　×
藁の敷かれた納屋に放り込まれる四人の兄弟。
×　×　×
嘉兵衛は頷く。
嘉兵衛「構わん。わしも淡路の頃から藁で寝よる。あいつらも同じじゃ。お前んところみたいな贅沢はしとらん」
ふさ、つんと顔を背ける。
すぐに気を取り直して、笑顔になる。
ふさ「なぁ、どうやった、江戸」

茶を湯のみに入れながら、
二人で肩を並べて話す。
嘉兵衛「全然ちゃうの。人も蟻のように多い。女も別嬪ばかりじゃ」
ふさ、嫌そうな表情。
ふさ「ほう……」
嘉兵衛、笑ってふさの脇腹を
摘まむ。
嘉兵衛「心配すな。お前の方が別嬪じゃ」
ふさ、笑う。
ふさ、機嫌を直して話を続ける。
ふさ「そんな与太話はええ。あったか？儲け話は」
嘉兵衛、野望に満ちた面持ちに
なる。
嘉兵衛「あった」
ふさ「どんな？」
嘉兵衛、茶を啜る。
嘉兵衛「言わん」
ふさ、目を丸める。
ふさ「なんで」
嘉兵衛、茶を飲む。
嘉兵衛「言霊、言うてな、口に出すと呪いが掛かってしまう事もある。じゃけの……」
嘉兵衛、ふさの様子に気付く。
ふさ、涙が頬を伝っている。
ふさ「なんでぇ？　なんでぇ、教えてくれんの」
嘉兵衛、慌てて取り繕う。
嘉兵衛「待て、ふさ、違う」
ふさ、嘉兵衛の胸を叩く。

ふさ「何が違うん！　女やと思って馬鹿にしとんのか！　嘉兵衛なんぞ阿呆じゃ！　阿呆が気張って調子に乗っとるだけや！」

嘉兵衛、ふさを抱きしめる。

嘉兵衛「待て！　思うとらん！　ふさは聡い」

ふさ、嘉兵衛に抱きしめられながらも、まだ叩いている。

ふさ「じゃったら、なんで教えんのや。自分だけ世に出て、楽しんで、それで満足か？わしは、どうでもええんか」

嘉兵衛、ふさを優しく抱きしめる。

嘉兵衛「そうやな……そうや」

ふさ、嘉兵衛へ顔を上げる。

ふさ「わしは、船に乗れん。じゃから……」

嘉兵衛、ふさの頭を撫でる。

嘉兵衛「そうじゃな。すまん」

嘉兵衛、立ち上がり、部屋の隅に置いていた髪と筆と硯を持ってくる。

ふさの前で白紙を広げて、更にもう一枚、江戸で書いた和人地のメモを広げる。

筆を持ち、半紙へ書き始める。

嘉兵衛「作戦はこうじゃ。見落としがあったら、言うてくれ」

ふさ、嬉しそうに頷く。

二人は頭を下げて半紙へ向かう。

ふさ「そういえばな、嘉兵衛」

嘉兵衛「ん」

ふさ「ややが、できたわ」

嘉兵衛の筆が止まる。
嘉兵衛「……え？」

○北風家・門前・外

嘉兵衛、巨大な屋敷の前に立つ。

○（回想）喜兵衛の家・居間

嘉兵衛、喜兵衛と話している。
嘉兵衛「新酒番船に、出ようと思います」
喜兵衛「思います、言うてもな……。あれは、出られる船の数が決まっとる。うちみたいな問屋じゃ……」
嘉兵衛「堺屋は、北風様の傘下じゃろ？」
嘉兵衛、睨む。
喜兵衛、嘆息。
喜兵衛「わしでは、お館様の説得は無理じゃ。自分で行ってこい。一応、話だけはしておいてやる。一応、な」
嘉兵衛、頷く。
（回想終わり）

○北風家・門前・外

嘉兵衛、大きな門の前で唾を呑み入っていく。

○同・風呂・中

大きな風呂に大勢の人が入っている。
嘉兵衛も腰を掛け、隣の人に訊ねる。
嘉兵衛「ほんまに、タダなんですか、これ」
銭湯の客「はじめてか？　兄ちゃん」

嘉兵衛「はい、淡路から出てきたばかりで」
銭湯の客、嘉兵衛の顔を見る。
銭湯の客「兵庫におる以上、北風様の加護からは逃れんで」
嘉兵衛「逃れん……ですか」
銭湯の客、ニタっと微笑む。
銭湯の客「そう、逃れんのや。顔、覚えとくで、兄ちゃん」
嘉兵衛「……はぁ」

○同・食堂・中

大勢の商人が食事をして酒も飲んでいる。
嘉兵衛の前にも魚や酒が置かれる。
嘉兵衛「まさか、これも、タダですか」
初老の男、北風荘右衛門（60）がごく自然に隣で食事をしている。
荘右衛門「みぃんな、タダ。やから、こん街の船乗りは、みんな、ここへ通うとる」
嘉兵衛「そう、ですか。そんな振舞いを何故なさるのか」
荘右衛門家、かかっと笑う。
荘右衛門「分からんか？　タダやから、得られるものもある」
嘉兵衛、腕を組み考える。
嘉兵衛「噺、か」
荘右衛門家の笑った目が開く。
荘右衛門「そう。ここ西宮は兵庫と大阪との行き来の要。幾らでも儲け話が転がっとる。それを拾わん手は、ない

じゃろ？」
物腰の据わった老人を見て、嘉兵衛は怪訝する。
嘉兵衛「あなた……は」
女中がやってくる。
女中「またこちらへ来られて。毒見をしておりませんよ、こちらの膳は……荘右衛門様」
嘉兵衛、驚愕する。
嘉兵衛「お館……様」
荘右衛門、笑う。

○同・応接間・中

キセルでタバコをふかしている荘右衛門。
対面に正座をする嘉兵衛。
荘右衛門「で、坊主。なんの儲け話や？」
嘉兵衛、真剣な面持ち。
嘉兵衛「儲け話……という分けでは」
荘右衛門、キセるの灰を受け皿へ落とす。
荘右衛門「喜兵衛ではやりきれん。せやから、ここへ来たんじゃろが」
嘉兵衛、唾を呑む。
荘右衛門「じじいにもなると短気にもなる。早う話せ。どうせ……」
キセルを受け皿でコンと鳴らす。
荘右衛門「北前やろ？」
嘉兵衛、汗が出て緊張感がみなぎる。
嘉兵衛「御存知、でしたか」
荘右衛門、嘉兵衛を睨む。
荘右衛門「誰やと思うとる。お前が乳

飲児の頃から、和人地への西廻りは、わしのもんじゃ」
　嘉兵衛、真摯に語る。
嘉兵衛「船を、持ちとうございます」
荘右衛門「お前さんには、まだ早かろう」
喜兵衛「わしの歳は関係ありません。機が、過ぎてしまいます」
　荘右衛門、キセるに葉を詰めながらゆっくりと話す。
荘右衛門「ロシアが、騒がしいか」
　嘉兵衛、驚愕する。
嘉兵衛「御存知で」
荘右衛門「いちいち驚くなや。わしを、誰や思うとる」
嘉兵衛「は、はぁ」
　荘右衛門、タバコを吹かせる。
荘右衛門「没落寸前でやった北風も、随分と盛り返し、今や兵庫随一。わしらが、何をして復興したか知っとるか？　坊主」
　嘉兵衛、腕を組み考える。
　はっと気づき周囲を見回すと、小声で話す。
嘉兵衛「密、ですか」
　荘右衛門、ニタっと微笑して煙を吐く。
荘右衛門「儲かるでぇ」
　嘉兵衛、身震いする。
荘右衛門「さて、話はなんやったかな？そうそう、新酒番船じゃったか」
嘉兵衛「なっ！　まだ、一言も」
荘右衛門「船は貸したる。一度切りじゃ。ほんで、一番やないとこの話の

続きは無しや。元より、そう、けしかけるつもりじゃったろ？」
嘉兵衛「ありがたき幸せ」
嘉兵衛、頭を下げる。
荘右衛門、カカっと笑う。
荘右衛門「まだ幸せちゃうちゃう。大見得切るのは、今からや！」
嘉兵衛、真剣な顔をあげて頷く。

○長屋・外観・夜

月が上がっている。

○嘉兵衛の自宅・居間・中・夜

蝋燭を立て、嘉兵衛の兄弟六人と喜兵衛が集まっている。
嘉兵衛「乗るのはわし、嘉蔵、それ以外は親方、手配してもろうてええですか？」
金兵衛（20）が前のめりになる。
金兵衛「わしは乗れんのか？　兄やん」
嘉兵衛「金兵衛、お前は兄弟中でも随一に聡い。文字も書ける。算術も交渉もできる。故に、やってもらうことがある」
金兵衛「なんや？」
嘉兵衛「紀州に、乗り込め」
金兵衛「は？」
嘉兵衛「ここ何度かの樽で、漁師共とは交渉済みじゃ。わしの後を引き継げ」
金兵衛、真剣な面持ち。
金兵衛「何を、引き継ぐ」
嘉兵衛「鰹じゃ」
金兵衛「鰹？」
嘉兵衛「熊野の沖で仰山とれる」

金兵衛「というても」
嘉兵衛「鰹はシナから流れてくる。駿河、伊豆よりも紀伊は早う獲れるんじゃ。それを、どこよりも早く江戸へ売りさばく」
金兵衛「できるんか、そんな事」
横で見ていたふさが口を出す。
ふさ「その力を見せつける為の、新酒番船じゃろ？」
嘉蔵、驚く。
嘉蔵「それが狙い、やったんか」
ふさ「阿呆。一つのことで一つを成すのは二流の仕事じゃ」
嘉兵衛、頷く。
嘉兵衛「最終の目的地は、ここ」
皆の円の中央に手書きの北海道地図を出す。
北海道の真ん中に、筆を立てる。
嘉兵衛「蝦夷じゃ」
ざわつく兄弟。
金兵衛「和人地、やないのか？」
嘉兵衛「無論、まずは和人地に腰を据える。じゃが近々、蝦夷の開発が進められる……と、江戸であった変なロシアかぶれが言うとった」
× × ×
（フラッシュ）
大黒屋光太夫が笑顔で手を振っている。
× × ×
嘉兵衛、生き生きと話す。
嘉兵衛「只の北前は、西廻りの連中に抑えられとる。やからこそ、東は手薄。松前もええ噂は聞かんからの……も

し、もしや！　幕府直轄、奉行所でも置かれれば、いっきに蝦夷も東廻りも開拓できる」

ふさ、嘉兵衛を見て頷く。

嘉兵衛「乗るやろ、みんな」

一同、頷く。

嘉兵衛「その一歩目が、新酒番船じゃ。天下が度肝抜かす速さで辿り着くで！方法はな……」

また話し始める嘉兵衛。

皆、真剣に聞いている。

ふさだけが、複雑な表情をしている。

○嘉兵衛の自宅・玄関前・外

嘉兵衛とふさが、弟達を見送っている。

嘉兵衛、ふさの顔を見る。

嘉兵衛「不満か？」

ふさ、首を振る。

ふさ「なーんも？」

嘉兵衛、ふさの頬を抓る。

嘉兵衛「顔に出とる。行きたい、行きたい、なんでわしは船に乗れんのじゃ、との」

ふさ、プイっと顔を背ける。

ふさ「出とりません、そんなもの。あぁ、寒い寒い。はよ入りましょうねぇ」

ふさ、腹を擦りながら家へ入っていく。

嘉兵衛、ふさの背を見ながら嘆息する。

○兵庫港・夜

T「兵庫港西宮」
暗い港に多数の船が停泊し、
周囲は赤々と火を灯し、酒樽が
積み込まれていく。
多くの商人、船乗りが集まり
活気づいている。

○同・船着き場・夜

嘉兵衛、嘉蔵、喜兵衛は酒樽を
積んでいる。
嘉蔵「すごいなぁ、兄やん。まさか、
船頭で新年を奔る日が来ると思わん
かったわ」
　嘉兵衛も荷積みをしている。
嘉兵衛「今年は、わしが一番になる。
来年は、お前がやるんやぞ」
嘉蔵「ええっ？　わしが？」
嘉兵衛「当たり前じゃ、全員でこんな
事ばかりやっとれるか！　何のために
兄弟六人おると思っとるんじゃ」
嘉蔵「お、おう！　そ、そうじゃな
……」
嘉兵衛「やり方は、今年で学べ。ええな」
嘉蔵「お、おう！」
　嘉兵衛、ふさの姿を見つけて
駆け寄る。
嘉兵衛「寒むないか？」
　ふさ、夜の海を眺めている。
ふさ「潮の匂いも、久しぶりじゃ」
　嘉兵衛も海を眺める。
ふさ「夜更けに松明だらけの浜。真っ
暗な海。嘉兵衛の海は、いつもこれや
な」
　嘉兵衛は笑う。

嘉兵衛「ふさと見る海は、いつもこれじゃな」
ふさ、嘉兵衛へ向く。
ふさ「十日もあれば、帰ってくるんじゃろ？」
嘉兵衛「抜かせ。五日で十分じゃ」
二人は笑顔で見つめ合う。
ふさ「ほな、いってらっしゃいませ」
嘉兵衛「おう。行ってくるわ」
嘉兵衛、船へ向かう。

○海岸線

朝日が上がって来る。
男の声「新年じゃあ！」

○兵庫港・船着き場・朝

船上の嘉兵衛達の顔に朝日が当たる。
浜からほら貝や太鼓が鳴り響く。
嘉兵衛「そいじゃ、行こうかの！　帆をはれい！」
船の帆が開かれる。
港から次々に船が出ていく。
嘉兵衛「さて、軽くいなすかの」

○御前崎港・船着き場

T「静岡県御前崎」
漁船が帰って来る。
弟の一人、善兵衛（18）が漁師に駆け寄る。
善兵衛「どうじゃった？」
漁師、胸内から紙を一枚取り出す。

善兵衛が受けとり、紙を開くと、簡易な地図と風向き、潮の流れが簡単に描かれている。

御前崎の漁師「新酒で一番なったら、荷の価値があがるんじゃったな？　故に、これは、仮じゃ」

善兵衛「おう。来年は高値で魚こうたるわ」

○串本港・船着き場

T「和歌山県串本港」

金兵衛と熊野の網元が帰って来る船を眺めている。

熊野の網元「こんな小細工せんでも、嘉兵衛なら一番になりよるで」

金兵衛、腕を組んで海を見据える。

金兵衛「只の一番乗りは、5日で走ると聞いた。何年も前の船じゃ」

漁師がやってきて、天候や波情報の書かれた紙を渡す。

金兵衛「誰にも破れん期日で走ったら、一生、名は語り継がれる」

金兵衛、熊野の網元を睨む。

金兵衛「故に、只の一番じゃ、あかんのや！　っと、姉御が言うとった」

熊野の網元「なるほどの。まぁ、嘉兵衛が一番になれば、わしも儲かる」

金兵衛、頷く。

○海上の船・甲板・外

嘉兵衛、船先で海を眺める。

険しく眺めると、振り返り、船尾へ向かう。

舵を切っている喜兵衛の前へ
行く。
嘉兵衛「左舷や」
喜兵衛「なんでじゃ、四国の方へ行ってまうで」
嘉兵衛「構わん。外へ出る海流れに乗る。その方が早い」
喜兵衛「その先は黒潮や。沖に流されるわ」
嘉兵衛、笑う。
嘉兵衛「まだ、鰹が来る時期やないな。天候もええ。この程度の潮が、一番早う船は動く。言う通り、舵を切ってくれればええ」
喜兵衛、顔を顰める。
喜兵衛「ほんまかいな」

○串本港・船着き場

船が入って来る。
浜辺で眺めている熊野の網元が
驚く。
熊野の網元「も、もう来たんか？」
金兵衛「知っとる海なら、これくらい朝飯前や。問題は、こっからじゃ」
船着き場へ走る金兵衛。
嘉兵衛も船を降りてきて、
金兵衛から天候などの情報を
得る。
嘉兵衛「一刻前か……ふむふむ」
嘉兵衛、空を見上げる。
嘉兵衛「天道様も味方じゃな」
船へ向かう。
嘉兵衛「金兵衛、いくで。帆を持て」
金兵衛も追って船へ向かう。

熊野の網元、驚きながら船へ向かう二人を見送る。

熊野の網元「まだ、半日ぞ……。こりゃ、5日どころやないな」

熊野の網元、嘉兵衛の背中を見送る。

熊野の網元「天下に、名が轟くで」

○御前崎港・船着き場・夕

善兵衛が浜から手を振っている。

善兵衛「兄やーん！　こっちじゃ！」

○同・船着き場・夕

嘉兵衛は船を降りて、指示を出す。

嘉兵衛「夜は時化る。錨を降ろして停泊するで」

錨が降ろされる。

○海上

月が昇り、日が昇る。

○江戸品川港・夕

大勢の人が川岸に集まっている。

皆、騒めいている。

江戸の人々A「まだ二日だぞ？　嘘じゃねえのか？」

江戸の人々B「見間違いじゃろう……」

ざわついている人々の中、華やかな半纏を来た江戸の商人Bが走り回る。

江戸の商人B「惣、一番じゃあああ」
人々は一斉に騒めき、品川の
先を指す。
船がやって来る。帆には「イ」
の文字。
伝馬船（小舟）が降ろされ。
そこに乗った嘉兵衛、嘉蔵等が
幾つかの酒樽を乗せて、河を
漕いでくる。
大歓声の川岸。
太鼓や鐘が鳴らされる。
伝馬船が岸へ着くと、直ちに
商人がやってきて嘉兵衛へ赤い
半纏を着せる。
酒樽が降ろされ、その場で
即売会が行われる。
大歓声の川岸。

○北風家・外観

荘右衛門が居間で酒を飲んで
いる。
男が入って来て、文を渡す。
文を見る荘右衛門、微笑する。
荘右衛門「二日は……破れんなぁ、誰
も」

○嘉兵衛の自宅・玄関前

寒空を見上げている、ふさ。
ふさ「始まるなぁ……。いよいよじゃ」

○江戸品川港・夜

酒が振舞われ、騒いでいる
嘉兵衛や江戸の人々。

○北風家・応接間・中

T「未開、そして海へ」

荘右衛門はタバコを吸い、嘉兵衛がその前に座っている。

嘉兵衛「この度は、良き船を預けて頂き、誠に、有難く存じます……」

荘右衛門、そっぽを向き煙を吐く。

荘右衛門「鰹は、儲かるか？」

嘉兵衛、肩の力を抜き頭を掻く。

嘉兵衛「全く……どこにでも耳がございますな」

荘右衛門「鰹が一匹、幾らになる。言うて一両やそこらじゃろ」

嘉兵衛「はぁ……」

荘右衛門、キセルを受け皿へ置く。

荘右衛門「何年、鰹を獲る算段や」

嘉兵衛、顔を伏せる。

荘右衛門、睨む。

荘右衛門「何を成す為に、何が必要や？それを得るのに、幾ら必要や？　商人なら、全て銭で算段せぇ」

嘉兵衛、頷く。

嘉兵衛「ごもっともです。しかし……」

荘右衛門、言葉を遮る。

荘右衛門「見た事あるんかい。己の、目的の場所を」

嘉兵衛、沈黙。

荘右衛門「見て、計算せぇ。何が必要で、幾らかかって、わしに、幾らで返せるのか」

嘉兵衛、顔を上げる。

荘右衛門、ニヤっと微笑む。
荘右衛門「甘い算段立てよったら、突き返すで」
嘉兵衛、頭を掻く。
喜兵衛「恩に着ます」
荘右衛門「そういう、商売や」

○街

嘉兵衛、腕を組んで考えながら歩いている。
自宅前に着くと、玄関に手を掛けようとするが、止める。
考え事をしながら停止し、また玄関に手をかけようとすると、自動的に開いた。
ふさが立っている。
ふさ「何しよるん」
嘉兵衛「……いや」
嘉兵衛、顔を伏せる。

○嘉兵衛の自宅・居間

嘉蔵と喜兵衛と妻の貞代も来ている。
喜兵衛「ほんまか？　銭、出してもらえるんか」
嘉蔵「それって、兄やん、船持ちってことか？」
嘉兵衛、頷く。
喜兵衛、嘉蔵は大喜びする。
嘉兵衛は真剣な面持ちのまま。
嘉兵衛「喜ぶのはまだじゃ。北風様は、そんなに甘い人ちゃう。利が取れんと踏まれたら、いつでも切られる。いや、それ以前に、碌な算段も立てれんよう

やと、今の船すらも取り上げられる」
ふさ、嘉兵衛へ鋭く言う。
ふさ「見てきたらええ。やりたいのは、北前じゃろ？　ここでぶつぶつ言うてて、まともな算段なんかできんじゃろ。絵にかいた餅で、北風様は満足せんで」
嘉兵衛、力を抜いてふさに問う。
嘉兵衛「そう、思うてたところじゃ」
ふさ「初めからそう言えばええ……」
嘉兵衛「見に、行くか。ふさ」
ふさ、表情が止まる。
ふさ「……ん？」
嘉兵衛「一緒に、見に行くか？」
ふさ、顔を下げる。
ふさ「……あん？」
嘉兵衛、ふさの隣へいき、背中を擦る。
嘉兵衛「行くか？　お前も」
ふさ「わ、わし……か、が……行って、何に……。……え？」
嘉蔵、喜兵衛も頷いている。
嘉蔵「姉御、いつも行きたげやったで」
喜兵衛も頷き、貞代へ向く。
喜兵衛「頃合いでの、貞代も今は乳がでる。くには、預けてもええんやで」
ふさ「え？　貞代さん」
貞代、お腹を押さえて頷く。
貞代「船を持ったら、屋号がつく。屋号があれば、店もいる。店を守るんは、ふさが適任や。やったら、行けるのは、今しかないんちゃう？」
ふさ、嘉兵衛へ向き直る。
ふさの目から涙がこぼれ落ちる。

ふさ「（泣きながら）船で、行くんか？」
嘉兵衛「当たり前や。わし等、船乗りやで」
ふさ「女を乗せると、海、時化らんか」
嘉兵衛「知らんわそんなもん。わし等、商売人や。見えるもんしか信じれん」
　嘉兵衛、ふさの涙を拭う。
嘉兵衛「男は皆、阿呆、なんじゃろ？」
　ふさ、頷く。
嘉兵衛「なら、知恵を出そうや、一緒に」
　ふさ、号泣し、嘉兵衛が抱きしめる。

○船上・甲板

　海を船が渡っている。
　ふさ、船先で地図を眺めている。
　精巧な北海道だけが記載されていない日本地図（赤水図）で、日本海側の街に丸印が上書きされている。
　嘉兵衛が隣に来て、地図をのぞく。
嘉兵衛「なんじゃ、その地図は」
ふさ「北風様にもらった。蝦夷以外、みんな書いてある」
　嘉兵衛も地図を覗き込む。
嘉兵衛「西廻りの港か」
ふさ「でも、西はぎゅうぎゅうじゃな。いろんな問屋が既に入っとる。どの道、蝦夷を開かにゃ先は無かった……って、北風様は知ってたやろな」
嘉兵衛「やから、若くて無鉄砲なわしが上手く乗せられた」
　ふさ、苦笑する。

ふさ「乗らんと、そこらの問屋で終わってしまうわ。長い物には巻かれとかんと……初めのうちは」
嘉兵衛「相変わらず、太い女じゃ」
ふさ、楽し気に海を眺める。
ふさ「お？　見えてきたか？」
ふさが指をさすと、先に松前の港や城が見えてくる。
じっと、ふさは眺める。
ふさ「意外と、街が栄えてしまっとる」
嘉兵衛「言うて、二百年は続く大名じゃ」
ふさ、真顔になる。
ふさ「二百年で、これだけか……とも言えるの」
嘉兵衛、頷く。
嘉兵衛「うむ」
嘉兵衛、舵を持っている嘉蔵へ向く。
嘉兵衛「右舷じゃ、嘉蔵！」
船がぐっと右へ旋回し、松前を横切っていく。
ふさ「何しよる！　行かんのか？」
嘉兵衛「見とれ！　とっておきが、すぐに見える」
ふさ、首を傾げる。
海を船が進んでいく。
ふさ、嶮しい表情で海の先を眺めていたが、どんどん顔色が明るくなっていく。
ふさ「な……」
函館の港が見えてくる。
簡素な漁村で、開発がされていない。

ふさ「なん、じゃ……ここ」
嘉兵衛、自慢げに胸を張る。
嘉兵衛「聞いとった通りじゃ。どうや、ふさ！　この港は！」
ふさ、目を輝かせる。
ふさ「最高じゃ！」
浜辺へ指をさす。
ふさ「弧を描く浜！」
山を指す。
ふさ「高い岬！」
両手を広げる。
ふさ「風もゆるい！　おまけに、なーんもない！」
空に手を上げる。
ふさ「やりたい放題じゃ！」
嘉兵衛「上がってみるか」
ふさ「おん！」

○海岸

船を停船させ、浜辺へ降りる二人。
ちらほらいる村人がこちらを見ている。
ふさ「あれは、アイヌか？」
嘉兵衛「知らん」
ふさ「知らん事があって、楽しいな」
ふさ、嘉兵衛の手を引く。
ふさ「あの山、登ろ！　探検じゃ」
山へ歩いていく。

○函館山・夕

山を登っていく二人。
嘉兵衛「どこまで登るんじゃ。日が暮れるぞ」

ふさ「もう少し、もう少しじゃ」
繁みを抜けると、函館が一望できる。
ふさ「見えた」
嘉兵衛も感慨深く頷く。
嘉兵衛「ええ景色や」
ふさ、手を丸くして望遠する。
ふさ「なんもない。淡路より、何もない」
嘉兵衛、ふさの肩を抱き寄せ、ふさの作った手の輪を覗き込む。
輪の先を、指で示す。
嘉兵衛「まずは、あそこに風呂屋を作る」
ふさ「ふむふむ。北風流じゃな」
嘉兵衛「少し、埋め立てた方がええか？」
ふさ「あれだけ浅瀬やと、船が寄せれん」
嘉兵衛が指すと、函館の街がどんどん変貌していく。
風呂屋ができ、海岸が埋め立てられ、長屋ができ、商人が行きかい、船も沢山止まっていく。
ふさ「ええよ、ええよ、もっともっと大きくなるよぉ」
嘉兵衛「ここに星型の館ができて、ここに白い教会」
街が近代化していく。
ふさ「ええよ、もっともっと」
嘉兵衛「ここに赤レンガの倉庫を作って、こん山にはロープウェイも吊るすかの」
ふさ「そんで？」
近代の夜景の街に代わる。

嘉兵衛「そんで、夏には花火をあげて」
花火が上がる。
嘉兵衛「冬には映画祭をするんじゃ」
ふさは笑顔で顔を上げる。
ふさ「何言うとるん？」
嘉兵衛「思いついただけじゃ」
ふさ、街を見下ろす。
ふさ「でも、ええな、そんな街になったら」
嘉兵衛「まだまだ、ずっと先の話じゃが」
ふさ、嘉兵衛の肩に頭を預ける。
ふさ「それには、幾らかかるんやろな」
嘉兵衛「算段、するかの」
二人はくすくす笑う。
ふさ「そうじゃな」

○北風家・居間・中

嘉兵衛、船の絵を描いて
荘右衛門にプレゼンする。

○嘉兵衛の自宅・中

ふさ、腹を擦りながら嘉兵衛の
元へいき、ピースする。
（二人目という意味）
嘉兵衛、驚く。

○高田屋本店

小さな小屋の前に、ふさ、兄弟、
喜兵衛と集まっている。
嘉兵衛、看板を掲げる。
「高田屋」の文字。
戸口へ取り付けると、皆大騒ぎ。
ふさが高田屋の船印入りの羽織

を人数分持ってくる。
それを着て並ぶ一同。
店の玄関前で、その後ろ姿を
眺めるふさ。
ふさ、頷いている。
嘉兵衛「よし。行くで！　日本中、走り回ったるで！」
一同「おう！」
ふさ、男達を見送る。

○船上・甲板・夜

暗い海を、船が泳いでいる。
嘉兵衛の声「ふさの印象？　か。荒波のような女じゃった」
ふさ、月を見上げる。
ふさの声「わしの波は、あんたの静かな闘志に引かれとるんじゃ。波を引くのは、月の仕業や」
嘉兵衛の声「月が光るのもまた、日の仕業じゃろ」
ふさの声「お互い様！　それでええな！」
嘉兵衛の声「いつも強引じゃ、ふさは」
暗い海を、船が泳いでいく。

（了）

本電子書籍は、2023 年 12 月 3 日発行の『第 27 回函館港イルミナシオン映画祭 2023 第 27 回シナリオ大賞・受賞シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。
シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第29回函館港イルミナシオン映画祭2023

第27回シナリオ大賞　函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

荒い波は月に引かれ、孤高な月は日に照らされて

作：小谷　悠

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2024 年 3 月 1 日　電子書籍版発行
発行：函館港イルミナシオン映画祭実行委員会 函館事務局
〒 040-0055 函館市末広町4番 19 号（函館市地域交流まちづくりセンター内）
電話　0138-22-1037　http://hakodate-illumina.com/
制作：株式会社新函館ライブラリ
〒 040-0051 函館市弁天町4番8号
電話　0138-84-1620　http://www.nhakodate.com/